

天才アート KYOTO



天才アートとは、障碍のある人の多くがもつ優れた感性と表現力、そこから湧き出る独創的なアート作品に対して、特定非営利活動法人 障害者芸術推進研究機構（天才アート KYOTO）が独自にネーミングしたものです。当機構は天才アートを推進し、その啓発・普及活動を積極的に行っています。



発行日 2020年8月25日（火）

発行者 特定非営利活動法人
障害者芸術推進研究機構

天才アート KYOTO

発行所 〒605-0811
京都市東山区大和大路四条下る
4丁目小松町 四条・新道アトリエ
info@tensai-art.kyoto
http://tensai-art.kyoto

編集 株式会社 三六六

天才アート

検索



『無題』佐野 靖文 Yasufumi SANO 1970 年生 W545×H392mm 色画用紙・アクリル絵の具 2019 年制作

展 覧 会

予 告

『オープン・スタジオ — 天才アートKYOTO総合展』 開催のお知らせ

2020年9月26日(土)～10月4日(日)

まで、「オープン・スタジオ」天才アート
KYOTO総合展」を当機構の拠点である
元新道小学校・新道アトリエで行います。

今回は従来の堀川御池ギャラリーではなく、
新道アトリエが会場である利点を生かし、
制作中の作品も含めてまさに「いま、
ここで」作品が生まれる臨場感のある展示
を行います。普段一般の方のアトリエ見学
を受け入れていなかったので、今回のように
アトリエを一般公開して展覧会を開催する
のは初めての試みです。

また、積極的に原画作品や複製画、各種
グッズの販売を行い、作家や作品の知名度
の向上だけではなく、より豊かな自立と社
会参加を目指します。

またアンステイチュ・
フランセ関西の協力の
もと、10月3日(土)
は「ニュー・ブランシュ
KYOTO2020」
にも参加し、当日は21時まで開館します。

※本展示会は、新型コロナウイルス感染症拡大防
止対策を行いつつ実施しますが、状況によっては
急ぎよ非公開となり、映像配信のみでの発表の形
になる可能性もございます。詳しくはホームペ
ジでお知らせします。

主催 NPO法人障害者芸術推進研究機構

共催 京都市 京都市教育委員会

後援 (公財) 京都新聞社会福祉事業団

京都市立総合支援学校長会

助成 (公財) 京都オムロン地域協力基金

(公財) 京都新聞社会福祉事業団

協賛 洛和会ヘルスケアシステム

文化庁地域文化創生本部

協力 アンステイチュ・フランセ関西

会期 2020年9月26日(土)

～10月4日(日) 11時～17時

*10月3日は「ニュー・ブランシュKY
OTO2020」のため11時～21時開館

会場 天才アートKYOTO 新道アトリエ

京都市東山区四条通大和大路下る4丁目小

松町130

制作室を中心に計6室

作品 天才アートKYOTO所属作家43名

の作品150点(予定)



会場の新道アトリエ

活 動

報 告

天才アートKYOTO

×

SUZURI

作品アーカイブ提供事業のお知らせ

「作品アーカイブ提供事業」の一環とし
て、登録作家やその作品の知名度向上や
多様なグッズ展開を行うため、新しく無
在庫販売のオリジナルグッズ作成サービ
ス「SUZURI by GMO」(<https://suzuri.jp>)
を用いて、順次新たなグッズ制作および販
売を行っていきます。

SUZURIとは、無在庫で受注後にグッ
ズ作成から配送までを一貫で行うサービ
スで、天才アートKYOTOの作品アーカイ
ブ画像を使って、グッズデザインを行いま
す。商品としてはスマホケース、Tシャツ、
トートバッグ、メモ帳、マグカップ、トート
バッグなどがあります。注文を受けること
に作成するサービスの特性上、当機構およ
び作家の金銭的負担や販売時の配送作業負
担がありません。また、今までラインナッ
プのなかった多様な商品でのグッズ展開が
容易になります。商品価格をこちらで設定
でき、販売価格からSUZURIの製作経費
を引いた金額が利益となります。

作成した商品は、SUZURIサイトを通じ

グッズサンプル



トートバッグ

マグカップ

スマホケース

Tシャツ

てのみ購入いただけます(インターネット
検索で「SUZURI 天才アートKYOTO」
と入力するか、掲載のQRコードをスマホ
で読み込むことで、すぐショップページに
アクセスできます)。現在、
当機構の作家の作品を順次
制作中です。グッズ作成次
第、SNSなどで順次広報
宣伝します。



今後も天才アートKYOTOの運営のため、
ならびにより一段と登録作家の知名度
向上と制作活動を活発化するため、読者の
皆さまのSNSでの「口コミ」発信など、
広報PRに協力をいただけますよう何とぞ
よろしくお願いいたします。



影山 弘樹 Hiroki KAGEYAMA 1991年生

影山は著名な音楽家やインコ、ピエロなどを好んで題材にします。キャンパスに描くときはアクリル絵具を用いて大胆に、ボード紙に描く時はペンや色鉛筆を用いて緻密に描きます。作品に登場する人物や動物たちは、実は親族であったり、同時期の音楽家であったり、その「関係性」に重点がおかれて描かれています。そのため影山作品からは、それぞれの「関係性」によって築かれた独特な世界観を感じとることができるのです。

影山 弘樹

TENSAI ART NOTE

天 オ
ア ア
ノ ノ
ー ト



上：『インコと作曲家』 W727×H606mm
キャンパス・アクリル絵の具 2019年制作
下：『ピエロ・カーニバル』 W652×H530mm
キャンパス・アクリル絵の具 2019年制作

大場 多知子

Tachiko OHBA
1977年生

大場は日常生活の中での「面白い、美しい、印象に残った」と感じたことを、植物、動物などのモチーフで画面に散りばめるように緻密に描き上げます。夢のような迷路のような、どこか私たちの観る行為を惑わすような画面構成ですが、その画中には必ず彼女のちょっとした仕掛けだったり、いたずらが隠されています。



『微生物』 W514×H363mm
アートボード・アクリル絵の具 2018年制作

大場 多知子

村上 茜

村上 茜

Akane MURAKAMI

1993年生

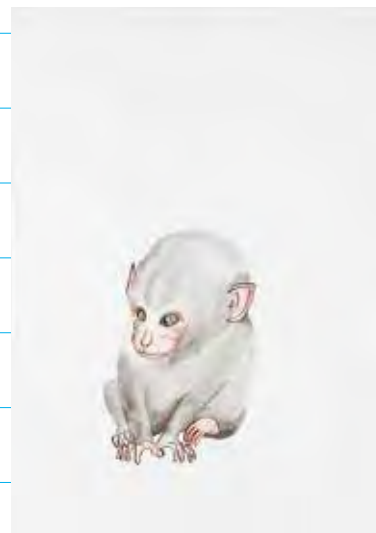
月夜を舞う雪女、新撰組をモチーフにしたキャラクターなどを村上は好んで描きます。アニメ・漫画大国である日本の影響を受けて育った村上は、ファンタジーの世界にアニメ・漫画文化を通して、自身を投影しているのかもしれない。私たちは想像の世界では誰にだってなれるのです。そんな当たり前でいて、でも忘れがちな自由を彼女の作品は教えてくれます。



『新撰組×雪女』 W100×H145mm
画用紙・水性ペン 2018年制作



『白雪姫』 W100×H145mm
画用紙・水性ペン 2018年制作



『子猿』 W372×H533mm
画用紙・水彩絵の具 2019年制作

庄野 隆太



『不動明王と金剛夜叉明王』 W174×H122mm
スケッチブック・鉛筆・色鉛筆 2010年制作



『宮本武蔵のくじら退治』 W542×H382mm
画用紙・えんぴつ・色えんぴつ 2018年制作

庄野 隆太

Ryuta SHONO 1989年生

庄野が描く動物たちや仏像、そして過去の名画は、全て「平面」に変換されます。彼の手にかかるモチーフは正面から横を向けられ、奥行きを奪われ紙に張り付き、ユーモラスにデフォルメされてしまうのです。鑑賞者はそのユーモアに微笑んだ時、庄野が創り出した「平面の世界」へと引き込まれていくようで、そんなある種の怖さや彼の作品の魅力の一つです。

調査報告

文化庁委託事業『令和元年度障害者による文化芸術活動推進事業』に関わる欧州事情調査（後編）

文化庁委託事業『令和元年度 障害者等による文化芸術活動推進プロジェクト』の一環として、当機構プログラム・ディレクターの伊東が欧州三国（フランス・スイス・オーストリア）への事情調査へ事情調査とマーケット開拓のための交流、およびPRを行いました。会報24号では報告の後編を掲載します。

グギング美術館
（オーストリア・ウィーン）

グギング美術館（Museum Gugging）は、オーストリアのウィーンの郊外にあるマリッア・グギング国立神経科病院の敷地内、芸術家が共同生活をしながら制作する「芸術家の家」の近くに2006年に開館しました。同施設には、グギング美術館、またオープンスタジオとしてアトリエ・グギング（Atelier Gugging）、販売部門を担うギャラリー・グギング（Galerie Gugging）があり、美術館としての機能だけでなく、展示や作品販売、美術館教育などを行う複合的な施設です。「芸術家の家」の作品はギャラリー・グギングを通じて積極的に販売し、世界中の美術館にコレクションとして収蔵されています。

グギング美術館では、芸術監督、キュレーターであるヨハン・ファイラツハー氏（Johann Feilacher）とお会いしました。



グギング美術館外観

彼は批評に重きを置き、作品が「現代美術」としてどういう価値があるのか、常に本やカタログ本制作を重要視して、作品を言葉で発信することに力を注いでいました。さらにはデザイナーの顔をもつヨハン・ファイラツハー氏の先導のもと、グギング美術館におけるブランディングは徹底していました。例えば、壁の色は落ち着いた赤色や黄色が選定され、しかるべき箇所に作家によるデザイン壁画が描かれていました。またアーティストたちのポートレイト

を飾るための部屋があり、訪れた観光客にとって、アーティストへの敬意が最大に払われた施設だと感じさせる構成となっています。

グギング美術館での面談の最初に、批評家であり精神科医でありデザイナー、アーティストなど、多彩な側面をもつヨハン・ファイラツハー氏から、「貴方は何のために来たのか？」と強い調子で問いを突きつけられました。このことから世界各國からの視察希望者が殺到する同施設において、「こういった理念で芸術と向かい合っているか？」という芸術に対してのスタンスが非常に重要であり、またその理念が尊重されていることが分かります。私からは



アーティストのポートレートが飾られた部屋

「私は障害者による芸術活動を推進する組織にいるが、障害は身体的なことではなく一番は社会との壁を指します。それらの壁を壊し、人類の文化と芸術を推進するために来た」と忌憚なく答えたところ、「私たちもまったく同じ理念を持っている」と、笑顔になり、快く調査を受け入れられ、美術の文脈を踏まえた上での詳しい解説を受けました。グギング美術館では「生の芸術」である「アール・ブリュット」という言葉は積極的に用いています。しかしながら、「アウトサイダー・アート」という言葉には否定的な立場でした。その根底には、グギング美術館は「芸術の外側」にいるわけではないという意識を強く感じました。

前号で紹介しましたエガールと同様に、グギング美術館はもうひとつのロールモデルといえる組織であり、今後の継続的な交流を約束して後になりました。



グギング美術館、ヨハン氏（左）と

仏・パリのアール・ブリュット関係 ギャラリー現地調査

フランス・パリのアート・マーケット事情の現地調査のため、アール・ブリュット関連のギャラリーを3施設 (Galerie du moineau écarlate Paris・Galerie Frédéric Moisan・Les Yeux Fertiles) 周り、マーケット調査や当機構のPRも行いました。

事情調査を行なった3つのギャラリーは、アール・ブリュット専門、オーナーによるジャンルを横断した作家選出、シュルレアリスムと関連してアール・ブリュットの作品を取り扱っているギャラリーであり、「アール・ブリュット」を取り扱うギャラリーとはいつてもそのスタンスは大きく異なります。

しかしながら、どのギャラリーもアート・フェアを重要視していました。そこではど

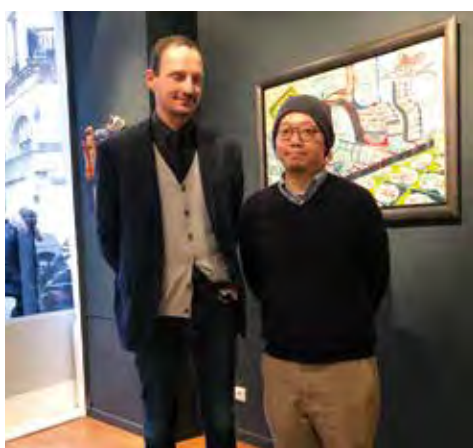


Galerie du moineau écarlate Parisのオーナー:エリック氏への当機構のプレゼン風景

まとめ

こも、収益をあげることよりも「新規顧客の発掘やコネクションの形成」を最重要視していることが共通していました。同時に、常に「美術批評」を重要視しており、作品紹介も「美術史の中での立ち位置に重きを置いていました。どのギャラリーも非常に好意的な対応を受け、長い時間をかけて質問に答えてくれて、カタログ等の資料も多く譲り受けました。

今回の欧州事情調査は、当機構のPRや海外のネット・ワークの構築だけでなく、障碍のある作家の作品売買取引を普及させマーケットの創出のための調査が目的でした。日本で、障碍のある作家の作品売買取引を普及させマーケットの創出を目指すためには、「ギャラリーをつくれれば」「値札をつけたら」「アート・フェアに出展したら」と



Les Yeux Fertiles のオーナー:ジャン=ジャック氏と

いった枠だけを揃えれば、どこからともなくコレクターがやってきて購入するわけではありません。EU域での事情調査で改めて実感したのは、アール・ブリュットを取り巻くアート・マーケットは極めて現代美術に近いルールで動いており、「芸術の歴史の中でこの作品はどういう位置にあるのか」「なぜこの作品は素晴らしいのか」を常に言語化し、発信していく仲介者の人物を中心に動いていくのです。このことから、日本に広く浸透している「障碍者アート」という枠組みそのものを、福祉業界や文化・芸術業界からも見直しをしなければならぬ現実がありました。

多くの問題が山積みであり、プロデュース側は「障碍のある作家の芸術」の推進を掲げながら、市場価値を高めるにはその枠組みを取り払うという矛盾と向き合い続けなければならぬ現状があります。このため、今後より多くのノウハウを蓄積して必要なシステムを構築し、共有化しなければなりません。

最後に、グギング美術館を出る際にプロデューサーであるヨハン・ファイラツハー氏から頂いたアドバイスを紹介します。

「この活動にはとても時間がかかります。Museum Guggingでの活動は35年、ギャラリーは25年をかけて今の地位があります。決して、決して歩みをとめないことが力になります」

本プロジェクトを元に、当機構は今後も積極的に国内外へのアート・マーケット創出への展開を行なっていく予定です。

報告書ができました。

「令和元年度障害者による文化芸術活動推進事業」の委託を受けて当機構が実施した、『障碍のある人の芸術作品の海外発信』の海外発信・展覧会からマーケット開拓まで』の成果物として、報告書が完成しました(A4サイズ・32ページ・オールカラー)。

昨年のシンポジウムでの岩崎仁美(クイーンズ美術館 展覧会ディレクター兼キュレーター)の基調講演や、今回の欧州事情調査の詳細が記載されています。

報告書は数に限りがありますが、送料250円をご負担いただければお送りすることができますので、ご希望の方は当機構まで「文化庁報告書希望」と記入の上、住所・氏名などをメール (info@tensai-art.kyoto) でお送りください。

なお、先着順ですので、在庫がなくなり次第締切となります。



ご家族さま
より寄稿好きな絵を描きたいように
自由に、自由に…

山元 暢

●絵本が大好きな保育園児

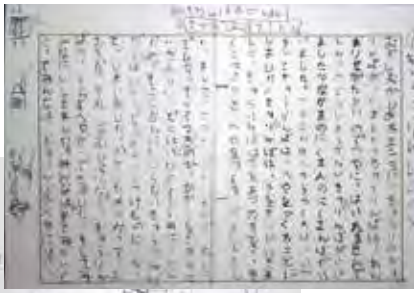
真菜子は小さい時から絵本が大好きで、休日のために図書館によく行きました。

当時住んでいた滋賀県の守山市立図書館から近隣の図書館、県立図書館などあちこちの図書館に行きました。

旅行先でも地域の図書館に必ず立ち寄るような感じで、図書館に着くと何時間も飽きずにずっと絵本を読んでいた。

そして、読んだ絵本の絵を書いたり、たまに絵本のまねをしてお話を創作(?)したりしていました。

保育園の時に真菜子が家で描いたお話「きゅうりんぼのへや」の原稿が出てきましたので興味のある方は読んでみてあげてください。



「きゅうりんぼのへや」の原稿とスケッチ

「きゅうりんぼのへや」

むかしむかしあるところに、きゅうりのきゅうりんぼが、いました。

きゅうりんぼは、あんまりせがたかいのでへやにはいれませんでした。

「どうしようかな。」きゅうりんぼがいました。

なかまのにくまんのにくまんぼがいました。

「じぶんのへやをつくればいい」

そしてきゅうりんぼはへやをつくることにしました。

きゅうりんぼは、きをきりにいきました。

きゅうりんぼはきをあつめるとさっそくこつこつと、へやをつくる、ことにしました。

そして、こつこつこつこつたのがおしろでした。

そしてつぎのひ、かざりをさがしに、いきました。

どこにいたかて？ うみにいたんだよ。

そこになんにもしらないきゅうりんぼがうみからだをあらうとつつけものになって、しまいました。

かざりもみつかった、おおきな、きれいなおしろになってきゅうりんぼの、くらすへやが、できました。

そしてみんなにしらせました。

みんなは、きてみたいといってみんなは

きゅうりんぼのへやにはいつてみました。

そしておちやをのみながら、いいました。みんなでもっときれいにしたいな。

そして、みんなはそうじをはじめました。でも、つつけものになった、きゅうりんぼうは、ぺたぺたつつけものしるが、おちてきました。

そして、みんなが、きづきました。

「きゅうりんぼが、つつけものに、なっている。」

そして、みんなにゆわれた、きゅうりんぼは、おもいだしました。

あ!!あのときうみからだをあらったからかもしれない。

きゅうりんぼは、あわててからだをあらいました。

するときゅうりんぼうはもとどおりになりました。

(おわり)

小学校に入ってから、ご存じの方も多い「かいけつゾロリ」シリーズ、「化け猫



大好きなTシャツを着て(17歳)



にせものさん(16歳作品)

レストラン」シリーズが大好きでした。本を読むのは今でも好きで、気になった本を思いついたように買ってきては読んでいます。

家で描く絵は、やはり読んだ本からイメージしたものが多いようです。

最近、人体や病原菌や宗教や化学などの本が多いようで、それが描いている絵にも現れているのではと思っています。

たまに少し気味の悪い絵を描くこともありますが、決して口は出さないようにしています。

それは、好きな絵を本人が描きたいように自由に描くことが一番と考えているからです。

だからこそ描いた絵を気に入ってもらえた



『ゲシュタルト崩壊フラグのはじまり』2013年制作、ボール紙・鉛筆(2枚連作)

時の喜びは、何ものにも代え難いように真菜子も感じていると思っています。

●絵を描くこと

真菜子は小さいころから絵を描くことが大好きでした。

保育園のころから絵は上手で、小学校を卒業するまで、毎年、展覧会などがあるたびに何かしら入選して賞状などを貰っていました。

家で絵を一生懸命に描き出したのは、小学校3年の時に滋賀から山科に引っ越してからです。

山科の小学校に移ってからADHDやうつ症状が強くなり、すぐに支援学級になりました。支援学級になっても絵は毎日一生懸命描いていたのを覚えています。

ペンネームとして「ゲシュタルト崩壊フラグ」を名乗り始めたのは中学生の頃からです。「ゲシュタルト崩壊」は認知心理学で使われる言葉で、まとまったものがバラバラになっていく感覚のことを言います。

見えるものを分解し、絵に表現する面白さを伝えたかったのだらうと思います。

ところで真菜子の祖母も絵を描くのが好きで、デイサービスで押絵や書画をたくさん制作しています。

絵を描くことが好きなのは、祖母の遺伝かもしれません。

●絵を売りたい

もともと自分でも絵を売りたいと思っていたようで、高校生になるとネットの友達にいろいろ教わりながらLINEスタンプ(かやぶきしき住居)を作ったり、ネットで絵を売ったりしているのを見て驚きました。直筆の絵が2枚売れ、ゲームを買って大喜びしていました。

高校を卒業してからマツアアラ(MATTUa-LA)にお世話になって個展を開いていただいたのですが、なんと京都新聞やLINEニュースにも掲載されたことで、たくさんの方がご来場になり、皆さん絵をいっぱい買ってくださいました。真菜子はそのお金



毘沙門市への出店(18歳)



手作り名刺(イラストレータで作成)

でまたまたゲームを買って大喜びしていました。

そんな時、山科の毘沙門市への出店のお誘いもあり、以降、毎年、春と秋に真菜子の書いた絵の缶バッジや祖母の押絵を並べています。

毘沙門市は、毎回、季節ごとの楽しいイベントにしています。

山科の毘沙門は春は桜、秋は紅葉が大変きれいですので、皆さまも機会がございましたら一度観光にお越しになり、真菜子の店にもお立ち寄りください。

●天才アートとの出会い

小さい頃は色鉛筆やクレヨン、コピックで絵を書いていましたが、中学校に入ってからパソコンで絵を書き始めました。SAI、フォトショップ、イラストレータなどの本格的なソフトで好きな絵を描くようになりました。

高校は東総合支援学校に通っていました。このときに学校に飾られた真菜子のデッサンを見て、重光先生にお声を掛けていただきました。重光先生からのお誘いで天才アートのことを初めて知り、すぐに登録してもらいました。

高校の時の絵は抽象画的なものや漫画的なものが多く、これもその時に読んでいる本や漫画に影響を受けているのではないかと思います。

天才アートではカバンに絵を描いたり、ポストカードやクリアファイルを作っていたらいて、いろいろな方に買っていただけることを大変喜んでいました。

天才アートに参加したおかげで毎年の天才アートKYOTO展だけでなく、京都国際映画祭2018の連携イベント、京都市学校歴史博物館やきょうと障害者文化芸術推進機構の企画展にも参加させていただきました。

天才アートを通じてたくさんイベントに参加することで、少しずつでも成長していることが親として何よりうれしく思っています。

これからも好きな絵を自由に描いて楽しく過ごしていけるよう願っています。

「文化庁移転・私たちができること推進チーム」による「文化庁ウエルカム動画」を公開中！

「文化庁京都移転・私たちができること推進チーム」（以下「文化庁チーム」という）は、平成28年11月、文化庁の京都移転を契機に、「文化の力で日本を元気にするために、自分たちに何ができるか」を考え、連携して互いの取組の推進を図るなど、市民ぐるみで行動することを目的に結成されたチームです。天才アートKYOTOもそのチームに参加しています。



文化庁ウエルカム動画の1場面

この「文化庁チーム」で何ができるかを議論した結果、今年度の取組として、チームメンバーが文化庁京都移転を歓迎する「文化庁ウエルカム動画」を制作し公開することになりました。京都の文化を振興する多様なメンバーの活動紹介やメッセージリレーなど、以下の3種類の動画がYouTubeで公開されています。ぜひ、ご覧ください！

- (1) WELCOME! 文化庁京都移転ーいよいよ文化庁が京都移転!!編ー (4分54秒)
URL : <https://youtube.com/OjicBZqNcM>
- (2) WELCOME! 文化庁京都移転ー私の「My Bunka」編ー (2分49秒)
URL : <https://youtube.com/OcKowZou7bE>
- (3) WELCOME! 文化庁京都移転ー私の「My Bunka」編ー 30秒 ver
URL : <https://youtube.com/jnOTxLeXOBw>

また、「京都市民しんぶん令和2年8月1日号」に「文化庁ウエルカム動画」について掲載されました。

デザインコラボふろしき第2弾発売

株式会社山田繊維「むす美」ブランドと天才アートKYOTOの作品アーカイブのコラボによる「ふろしき」の第2弾が発売されました。今回、商品になったのは、TSUCHIYA AKOさんの「いのししの子供たち」です。鮮やかな色彩とキャラクターのかわいらしさが際立つふろしきになりました。ふろしきとしての用途のほか、大きなハンカチやタペストリー、ランチョンマットなどとして使うのもおすすめです。きれいなパッケージに入っていますので贈り物にも最適です。



会員寄付およびボランティアさんを募集しています

支援していただける会員や寄付、また活動をサポートしていただけるボランティアさんを募集しています。詳しくはホームページに掲載していますので、ご覧ください。
<http://tennai-art-kyoto>

広告主さま募集中！

『会報 天才アート』は、当機構の活動にご賛同いただける企業様や団体・組織の広告協賛を募集しています。会報の発行部数は毎月3,500部で、会員・協賛団体、関係機関、各地の美術館などに配布・配架をしています。1枠（55×22mm）：1万円（4回掲載）
●お問い合わせ・お申し込みは info@tennai-art-kyoto.net

〈編集後記〉

新型コロナウイルスの感染拡大によって、日常生活や経済活動そのものに大きな変化を促し、新しい常識のもとで行動すること、いわゆる「ニューノーマル」という考え方が提唱されています。

9月末に開催を予定している「オープン・スタジオ オートアートKYOTO総合展」もコロナ対策を万全に施して実施します。なお、新道アトリエで作品展を開催するのは初めての試みですので、必ず成功させたいと考えています。「コロナ後の世界にこそ、アートが必要」と逢坂恵美子国立新美術館長も発言され、美術鑑賞を重ねることによって「感じ取る力」が鍛えられ、「目に見える物事をうのみにしなくなる」はずだと、語っておられます。

「オープン・スタジオ オートアートKYOTO総合展」は、皆さまの期待に応えられる作品展にすべく、登録作家・スタッフとともに登録ボランティアの協力も得て、鋭意準備を進めているところです。当日の会場を心よりお待ちしております。

【表紙の作品について】

佐野の作品の多くは、画面全体が絵具で覆われる状態で描かれています。その中心のない絵を前にすると、鑑賞者はどこに視点を置くべきか戸惑うかもしれません。

しかし、彼の作品を連作で観ると、実は一作品ごとに素材やタッチを変えていることが分かります。反復によって描かれる彼の作品をじっくり観ていくと、時に炎や煙のような不定形な形状にも、ある種の佐野の絶妙な力加減で描いていった身体を想起させます。



『無題』
佐野 靖文 Yasufumi SANO 1970 年生
W545×H392mm 色画用紙・アクリル絵の具
2019 年制作

広告協賛企業（順不同）

わたしたちは天才アート KYOTO の活動に賛同しています



夢、そして誇り。この街で…
洛和会ヘルスケアシステム®
洛和会丸太町病院 洛和会音羽病院 洛和会音羽記念病院
洛和会音羽リハビリテーション病院 洛和会東寺南病院

吉村建設工業（株）

京都市中京区西ノ京小倉町135番地
075-802-1360



妙心寺 塔頭

養徳院

永代供養のお寺 075-461-2898

京都上鳥羽の
印刷会社

MORI
(有) 森田美術印刷

京都市南区上鳥羽火打形町12 ☎ 075-692-3131

画材・額縁
画箋堂
京都・河原町五条

一級建築士事務所
町家・古民家再生 / マンション改修

(株) 共立ホーム
エンジニアリング

06 (6788) 5402 kap@hyper.ocn.ne.jp

Kuretake